近代東京語質問表現における終止形式の考察

――その通時的展開について――

田中章夫

目次

第一部　時代的変遷
（一）二つの変動期とその意味
（二）終助詞カの響きをやわらげ、避ける諸方向から見た各時代の表現の特性
（三）結び
第二部　資料の位相差の問題
第三部　資料

第一部

一

本稿は東京語の成立過程にみられる質問表現[註1]について、その終止形式の様相を口頭語資料によって考察したものである。（資料については第三部参照）

一般に現代東京語における口頭語の質問表現は、その終止形式の様相から次の六つに分けられる。

第一表　質問表現の諸形式

疑問の詞を含むもの（疑問の詞に質問の働き―表現性陳述―がある）	a、終助詞をもつもの……	「いくつですか」
	b、終助詞をもたないもの……	「何時になります？」
	c、文が未完結な形のもの……	「君、何年生？」
疑問の詞を含まないもの（終止部に質問の働き―表現性陳述―がある）	a、終助詞をもつもの……	「お金持ってるの？」
	b、文が未完結な形のもの……	「こんにちわ、お兄さんは？」
	c、完結した文で文末にイントネーションをもつもの…	「皆さまお変りございませんか？」

この分類に従って、東京語の成立過程における質問表現の、すべての終止形式を分類すると、第二表のようになる。なお、表の下段には湯沢幸吉郎博士著「徳川時代言語の研究」によって、江戸期京阪語における終止表現の様相を比較のためにあげておいた。

この第二表にあげたものの中で、歴史的な消長のみられる主なものを、時代順に排列すると、おおよそ、第三図のように並ぶ。

第二表

	江戸語・東京語 疑問の詞を含むもの	江戸語・東京語 疑問の詞を含まないもの	江戸期京阪語（湯沢幸次郎博士著「徳川時代言語の研究」による）
A、終助詞カの系列に属するもの			
カ	特殊な接続として カ ｛丁寧辞（＝助動詞）＝カ ／ 準体助詞の＝カ	特殊な接続として カ ｛丁寧辞（＝助動詞）＝カ ／ 準体助詞の＝カ ／ （接頭語お）＝動詞連用形＝カ	特殊な接続として カ ｛丁寧辞（＝助動詞）＝カ ／ 準体助詞の＝カ ／ （接頭語お）＝動詞連用形＝カ
カ＝終助詞	カエ・カイ・カナ・カノ・カネ・カワ・カイナ・カイノ（テノカイ）	カエ・カイ・カナ・カノ・カネ・カヨ・カイナ・カイノ	カエ・カイ・カナ
カシラ系	カシラ	カシラン・カシラヌ・カシラネエ	カイノ・カイナ
B、終助詞ヤ			
	ヤ	ヤ	ヤ
C、その他の終助詞			
	ゾ・ゾイナ・ゾイノ・ノウ・エ・イ・ト・トエ・ッテ・ッテネ	ゾ・ノウ・ト・ッテ・連用形＝テ・エ・ノ・ノサ・コト	ゾ・ゾイナ・ノウ・エ・ナ・ヨ・ヤイ・トヤ・トナ・テヤ・トイノ・イナ
	連用形＝テ・ナ・ノ・ノサ・ノヨ・ネ・ヨ・サ・ゼ・ニ・デ・ヤラ・コトゾ・ヤヨ		
D、その他の形式			
○文末が未完結な形のもの	同上	同上	同上
○完結した文で文末イントネーションをもつもの	同上	同上	同上

なお、個々の終止形式についてのくわしい論証は数表・グラフが繁雑になるので、他の機会にゆずり（データについては第三部参照）、この稿では、第三図を中心に、主な「傾向」をたどりつつ、考えをのべることにする。

近代東京語[註2]の資料の中に、口頭語の資料として価値の高いものが現われ始めた、宝暦（一八世紀中頃）以後について、この第三図を考察してみると、二つの変動期が認められる。

その一つは、終助詞ヤ、が質問表現から姿を消し、少しおくれて終助詞カエ・ノウも消滅し始めて、あらたに、終助詞カネ・カイ・イ・トが現れた時期、文化・文政期である。

他の一つの変動期は明治初期から中期にかけてである。この時期には、近代東京語質問表現の中核をなす終助詞、およびカの接続面に変動が起った。すなわち、江戸期女性語の質問に使用度の高かった

例1、おめへたちも、最うおあがりか」「アヽ」（浮世風呂）

というような「接頭語お＝活用語連用形＝カ」の形の質問表現がなくなり、また終助詞では、カエ・カナ・カノ・ナ・ノウ・ゾエが消滅し、一方カシラ・ノ・ノサ・ノヨ・テ（連用形接続）・ッテ（「留守だッテ？」のようなもの）コト・サなどの終助詞をもつ質問が現われて来た。

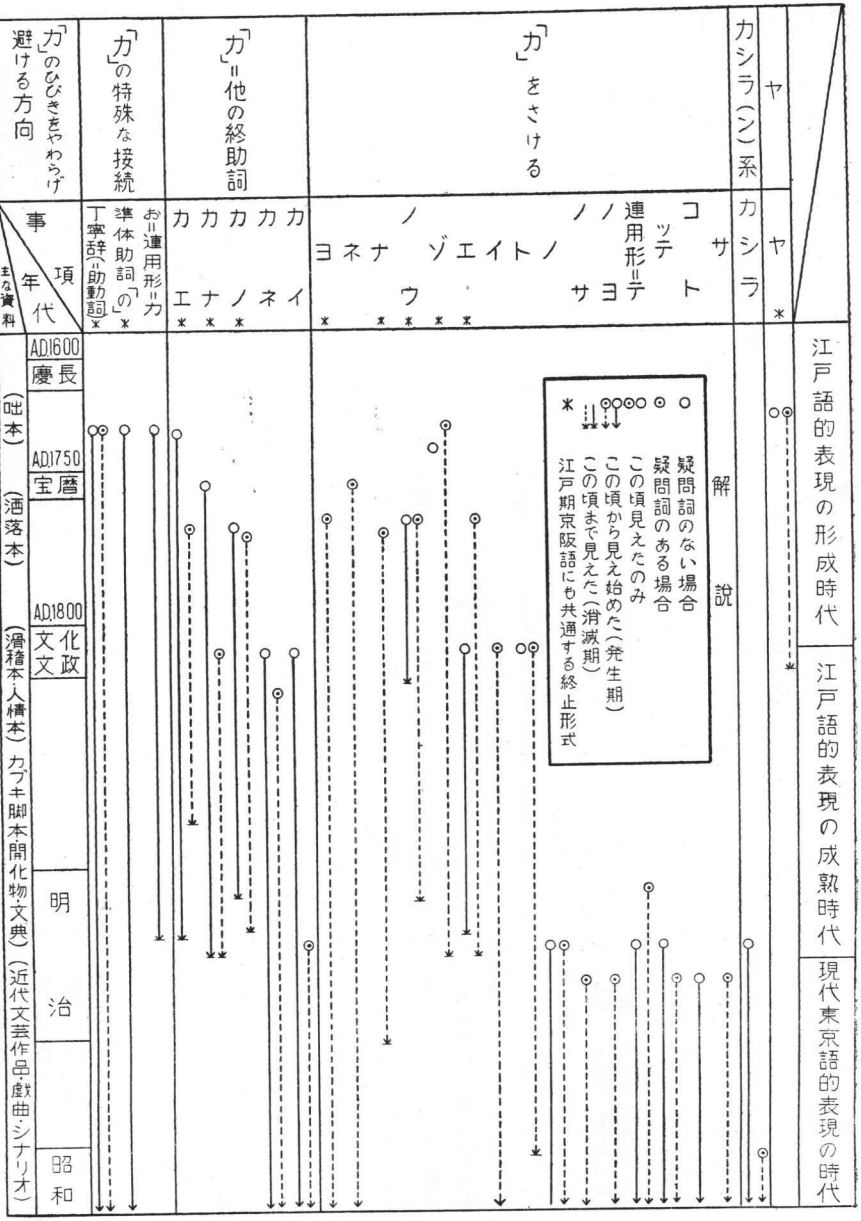
一般に江戸語は関東方言を母体として、三河方言や京阪方言の強い影響を受けつゝ、都会語として、共通語化の道をたどったと云われている。中でも、当時の文化・商業の中心地、京阪地方の言語が、種々の方面から非常に大きく働いたことは先学諸氏の等しく説かれるところである。そこで今のべた江戸語にみられる質問の終止形式を、同時代の京阪語のそれと比較してみると、第一変動期（化政期）を迎えるまでの終止形式は、第三図の示すように「接頭語お＝活用語連用形＝終助詞カ」の質問と、終助詞ネのある終止形式をのぞいては、すべてが京阪語の質問表現にも見られるものである。一方、第一変動期以後に新しく現われた諸形式は江戸期の京阪語には見られないものである。このように、それまで京阪語的形式にたよっていた江戸語の質問表現から、京阪語的形式が次第に衰え、新たに、江戸語的とも云うべき、独自のものが現われて来た事は、江戸語の質問表現の成熟を物語るものと云えよう。以上の事から、江戸語質問表現における終止形式は化政期の第一変動期をさかいに、その形成期と成熟期にほぼ二分されると考えられる。

なお化成期に現われる終助詞カイは、それ以前にカイが見られないところから、またこの時期は中村通夫氏はじめ、諸氏の御研究によって明らかにされているように、〔a e〕が〔ai〕に移りかわる音韻変化が固定した時なので、関西系のものとは別に、終助詞カエからこの時期に分れたものではないかと思われる。

次の第二変動期の明治前半にいたると、前にのべたように、江戸語にあった多くの終止形式が消滅し、現代東京語を特色づける終止形式が次々に現われている。その上、第二変動期以後にも残った、江戸語以来の終助詞カイ・カネ・ネ・イは、現代東京語では、カネ・ネの質問は老人などに限られ、カイ・イの質問も山の手言葉にはあまり見られなくなりつゝあり、共に衰えつつあるものと云えるのではあるまいか。これらの事から、この時期に現代東京語的形式が形成されたと考えられるのである。

〔註1〕宮地裕氏の論文「疑問表現をめぐって」（国語国文二〇七号所収）における「説明を求める表現」と「判定を求

オ三図　主な質問終止形式の消長



める表現」とを「質問表現」と呼ぶ。

〔註2〕 都会語としての東京語の成立過程全体を「近代東京語」と呼んでおく。

二

一般に疑問文とか、質問表現とか云うものは、江戸末期明治以来出版された日本語会話書類や多くの口語文典によると、

例2、Ano daiku wa kita ka？（チェンバレン著「A Handbook of Colloquial Japanese」）

例3、お前も見たいか」（文部省「中等文法」）

のように、文末に終助詞カがついたものが標準的な、オーソドックスなものと認められて居る。ここで取り扱った近代東京語資料においても、このような言い方が、江戸語以来質問表現の主流になっているのは勿論である。が、それだけではなく、今まで述べたように、特殊な終止形式の分化、発達が著しい（第四表参照）。また終助詞カの接続面をみても、例1、であげた「お＝活用語連用形＝カ」のような接続、あるいは

例4、「卒業ワイツデスカ」（言語生活「録音器」欄）

例5、上方へ行」といったら「あてが有のか」といふ。（夢酔独言）

など、丁寧辞デス・マス・ゴザイマス……や、準体助詞のをはさんで文末に接する、特殊な接続があり、くわしい数字は省略するが、例4、例5、のような接続は時代と共に、その使用度も増し特に、江戸末期、明治初期頃の資料から急に増加しているようである。

佐久間鼎博士は「現代日本語法の研究」の中で、「カ」のついた発問は「概して詰問的な態度として受取られる傾がある」（68ページ）と述べておられるが、このような「カ」の性格が、「カ」の特殊な接続や、「カ」以外の特殊な終止形式を質問表現の中に発達させたのではなかろうか。

そこで、この「カ」の詰問的な強いひびきを柔らげたり、避けたりする方向について考えてみると、第三図の上段にあげた三つの方向が認められる。すなわち、「カ」の特殊な接続による方向「カ」に他の終助詞がつけ加わる方向・「カ」を避けて、特殊な終止形式による方向である。この他に、独白的な疑問・不審を表わす終助詞カシラを文末に持ち、そこに上昇調イントネーションが加わる、婉曲的な発問なども、この傾向の一つの現われと考えられよう。

以上のような事を考え合わせて、さきに（一）で述べた、「二つの変動期によってわかたれる三つの時代」について、再び考察してみようと思う。まず、第一変動期までの時代、すなわち京阪語的終止形式によっていた、江戸語的形式の形成時代の特徴は、終助詞カと同様に「質問の表現性陳述」[註3]をになっている終助詞ヤ」による質問がみられることである。次の江戸語的終止形式の成熟時代（第一変動期から第二変動期まで）は、「カ」に他の終助詞を加えて「カ」のひびきを柔げる終止形式に「カネ」と「カイ」また、「カ」を避ける言い方に「イ」、と計三つの終助詞が発生して、質問の終止形式が豊かになった。ここにこの時代の特徴が認められる。最後の現代東京語的終止形式の時代（第二変動期以後）になると、「カ＝他の終助詞」の言い方が衰えて、「カ」を避けた終止形式[註4]が著しく発達し、さらに、婉曲な質問表現、「カシラ」による発問が生れるのである。ところが、現代東京語的形式の時代における、「カ」を避けた終止形式[註4]や、「カシラ」

による質問表現は、

例6、「越智さん、やっぱりお独りなの」「その方が気楽だからさ」（浮沈）

例7、「文子の時計にお気づきになって？」「いいえ」（シナリオ千羽鶴）

例8、「中野へ散歩に行ったッて」時雄は突如として問うた。（蒲団）

例9、「伯父さん、お変りないこと」「ないよ」（浮沈）

例10、お孫さんあるのかしら？」「多分おいでになりませんでしょう」（えり子とともに）

など、文中に疑問の詞がない場合には、文末に必ず、上昇調のイントネーションがある。もし、これがないと、右のようなものはすべて、他の表現（確述・命令・疑い・不審など）と区別がつかず、間違えられる恐れがある。言いかえると、この場合のイントネーションは、疑問の詞や、質問の終助詞カ・ヤと同じように、「話し手の質問を聞き手にもちかける機能」註3（質問の表現性陳述 註3）を持っているのである。

結局、これらの質問表現は、終助詞カを避けたことによってもたらされた、質問表現の稀薄化を、イントネーションで補ったものと考えられるのではあるまいか。そしてこのような終止形式の成立に、東京語が洗練されて来た姿の一端がうかがわれるのではあるまいか。現代東京語的終止形式の時代の最も顕著な特徴は質問の表現性陳述をイントネーションにゆだねる、以上のような云い方が著しく発達したところにあると考えるのである。

もちろん

例11、「何しに来たんだい」と（綴方教室）

例12、「ぬしやさむかござんじんか」「さむいともく」（廓中奇談）

例13、「小三どののお宿は妾でござりますかな」「ハイ」（仮名文章娘節用）

など、疑問の詞や終助詞カや「カ＝他の終助詞」をもつ質問表現でも、その終止部に上昇調のイントネーションがある場合もある。しかしこの場合のイントネーションは、質問の表現性陳述をになうものではなく、ただ単に、言葉にニュアンスをもるものであって、さきに述べたイントネーションとは性格の異るものと考えられる。

〔註3〕時枝誠記博士は文における陳述作用を、「文を形式構造の上で統一し、客体的な思想を主体的に統一し表現する作用」として居られるが、「文を形式・構造の上で統一する作用」と「客体的な思想を主体的に統一し表現する作用」とは次元の異る二つのものと考え、前者を叙述性陳述（云いまとめ——云いおさめる作用）後者を表現性陳述（云いあらわし——聞き手・読み手へもちかける作用）と呼ぶ。こう考えないと、「早くしないか。みんな待ってるよ」のような「質問の表現形式を借りた命令表現」などは説明できない。すなわちこの場合の命令の表現作用は、決して「カ」にあるのではなく、「カ」には文をまとめる働き（叙述性陳述）があるだけで、命令を表現する働き（表現性陳述）はイントネーションに托されている。

〔註4〕「カを避けた終止形式」には（行くのカ→行くノ？）のような場合だけではなく（行くのですカ→行くノ？）

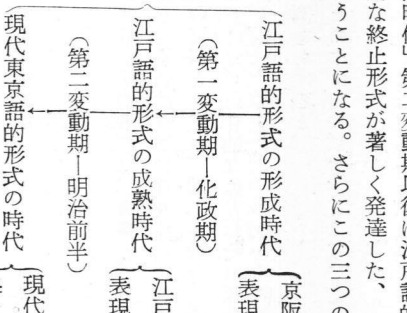
の場合のように「言い切らない云い方」も含める。

三

以上、(一)、(二)にわたって近代東京語の質問表現における終止形式を通時的に考察してきたが、それをまとめると、つぎのようになる。

ここに取扱った終止形式には、その歴史的な変遷から二つの変動期、すなわち、文化文政期の第一変動期と明治前半期の第二変動期が見られる。これら二つの変動期によって分けられる三つの時代について考察すると、第一変動期までは京阪語的な終止形式が中心になっていた、「江戸語的形式の形式時代」、第一変動期から第二変動期までの間は、江戸語独自の終止形式が発達した、「江戸語的形式の成熟時代」第二変動期以後は江戸語的終止形式が衰え、現代東京語的な終止形式が著しく発達した、「現代東京語的形式の時代」ということになる。さらにこの三つの時代の質問表現の特徴を、疑問の詞のない場合を中心にしてその表現性陳述のあり方から見てみると、「江戸語的形式の形成時代」には、終助詞カと共に、「質問の表現性陳述をになう終助詞ヤ」が残っていた。「江戸語的形式の成熟時代」は終助詞カを中心とした終止形式が豊かで、バラエティに富んでいた。「現代東京語的形式の時代」は終止部の上昇調イントネーションに表現性陳述をゆだねる質問が著しく発達した。

以上が、その概観である。これを図示すると、左のようになる



第二部

第一部では江戸語と東京語の資料を時代順に排列し、そこにみられた質問表現の終止形式を、時代的に分類して得た結果について述べて来たが、この結果をそのまま、「歴史的な変遷」と結論づけることには、大きな問題がある。その一つは、種々の面から考えられる位相の問題であり、他の一つは、江戸語資料の口頭語

資料としての価値の問題である。ここではこの二つの面から、第一部で出た結果について、再検討を試みることにする。

まず、この二つの面から、第三図の左はしにあげてある資料の性格を検討しつつ、論を進める。

なお、ここでとりあげる位相的考察は、資料と、その中に出て来る登場人物の社会的な（階級的な）位相を中心におこなう。

宝暦以前の江戸言葉の資料としては、咄本が唯一、最上のものとされている。この咄本には、位相的な偏りはそれ程感じられないが、他の資料にくらべると、数が少く、その上、口頭語資料としての価値が低い。一例をあげると、

例14、「先日あつらへた頭巾は出来候や、取りに参りたり」（新話笑眉）

のように、擬古文のような文章語的色彩が強いのである。それ故に、このような資料によって、当時の口頭語を、中でも終止形式のような微妙なものを推定したのだから、ここで得た結果をそのまま宝暦以後の結果につなげて考えることは不可能である。しかし、本稿で取扱った質問表現の場合は、咄本のみに見られる特殊なものはなく、ここにみられた終止形式は、すべて後の、他の資料にもあるので、一応、咄本で得たものも取扱っておいたのである。

咄本に続いて、宝暦・明和頃から、江戸洒落本が、口頭語資料として使えるようになって来る。しかし洒落本はその性格上、当時の人々に「廓言葉」「さとなまり」とよばれていた遊里語に、位相が偏っている。それ故、これを以て当時の江戸語を推定した、この時代のデータは、他と同列に扱うには多くの危険を伴なっている。文政一三年刊行の「嬉遊笑覧」（巻之九）には

「吉原遊女の詞一種ありて、他に異なるやうなり。故に、徒流が『なんせ、しんす、りんす、などを初めとして余国に聞ざる言葉多し。奇語と云べし』と云へり。おもふに、これもと嶋原詞の名殘なるべし。〔一代男〕（六）島原詞に、有ます、といふべきを、あんす、と云へり。吉原詞の末をはぬるは是なり」と見え遊里語は京島原の言葉が東漸したものと推定している。

こうなると、この頃の質問の終止形式が「京阪語的である」という、第一部での結論は、あるいは資料それ自身の性格によってもたらされたものとも考えられるのである。しかし質問の終止形式の場合は、洒落本だけに見られる終止形式は一つもなく、また滑稽本に多くみられる終助詞カネも、質問表現としては多少疑わしい用例だが、寛政一二年刊行の洒落本「辰巳婦言」に、

例15、「又おかぶの唐人か」「ヲット夫はいわずかたらずナ」「わが心チ、チン〳〵かね」「コウたか公ぬしゃァ湯島の時分から見るのに。いつもかはらねェの」（辰巳婦言）

という例が一例みえている。

菊沢季生氏は「国語位相論」の中で、終助詞エ・カエを「遊里言語の最も特徴ある情緒的な表現」（38ページ）と説いて居られるが、質問表現においては、咄本・滑稽本・人情本の町人言葉にも、さらには「江戸市川評判図会」では大名の御前女中の言葉にも見られる。従って、これらは特に遊里言語と呼ぶ程、位相上の制限があるものとは思えない。

以上のことから、本稿で取扱った質問の終止形式においては、遊里の云い方が、それ程一般江戸語とかけ離れていたとは考えられないようである。

化政期からの資料の中心は、まず滑稽本に、少しおくれて人情本に移って来る。一般に、滑稽本は下流町人、人情本は上流町人の社会に生き、言葉の上にも、こういった、位相的な違いがあると云われている。まず、これらの資料に見られる質問の終止形式を、前の洒落本のそれと較べてみると、終助詞カネによる質問は洒落本には非常に少く「カイ」は全く見られず、滑稽本に至って突発的に現われている。この事実は、やはり洒落本と滑稽本の間に、位相的な断層を感じさせるものである。さきにあげた「辰巳婦言」の「カネ」の例、(例15)も、洒落本に現われたものとは云え、話手聞手ともに遊里に遊びに来た町人であり、さらに「辰巳婦言」の作者が、滑稽本の代表的作者、式亭三馬であることを考え合わせると、洒落本の用例としても、あるいは、特殊なものと見るべきかもしれない。

結局、終助詞カネ・カイが化政期に現われたということは、単に時代的変遷としてのみ解決すべきではなく、資料の位相的推移と云うことも考えるべきではあるまいか。しかし、そう考えても洒落本とは云え、遊里に出入する遊客や雇人の言葉が町人言葉とそんなにかけはなれて描写されているとは思えないので、「カネ」「カイ」の発生が寛政末をそれ程さかのぼるとは考えられない。またたとえ、これらが滑稽本人情本より前から、江戸語にあったにしても、これらがこうして文芸作品の上に現われて来たことは江戸語史上、大きな意義がある。一方、この時期は、江戸の人口が百万を超え、社会史的にも江戸町人社会が成熟した時にあたるので、江戸語的終止形式の成熟期はやはり、第一部でのべたように、滑稽本・人情本の時代においてよいのではあるまいか。

次に滑稽本と人情本の終止形式を比べてみると、終助詞カイ・イのある質問は滑稽本だけに見えて、人情本には全く見られない。これはやはり、滑稽本と人情本の位相的性格の差によるものと思われる。「カイ」「イ」のある質問は滑稽本の世界、すなわち下流町人の間で行われたものと推定されるのである。

第一部で第二変動期と呼んだ、明治前半期のはげしい変化も、単に時代的なものとしてのみ、考えることは出来ないようである。

明治以後、東京語の中心は、標準語確立の動きと共に、江戸語の中心基盤であった下町から、山の手に移り、次第に山の手言葉が東京語の主流となって、ここに江戸語では全く見られなかった終止表現が発生した、ということは容易に考えられるところである。しかし、この現象が明治初期の短期間に、突発的に表われたという、第一部の結論は、言語現象として、やゝ不自然のように思われる。

そこで、この突発の原因を検討してみると、その一つに、幕末から明治初期にかけての口頭語資料の貧困があげられるのではあるまいか。黙阿彌の作品で代表される、幕末江戸歌舞伎の脚本もまた、この頃に出た亜流人情本とよばれるものも、共に当時の口頭語資料としては価値が低く、みな江戸期の作品の型を受けついだもので、わずかに開化物にやゝ資料価値のあるものが見られるが、これとても数は少いのである。この他、外国語の会話書、文典類に口語を写したものはあるが、場面が偏りすぎていて、終止形式などの研究には適さない。

しかし、これら幕末から明治初頭にかけての資料の貧困より以

上に、明治前半期の突発を招いた、大きな原因は、江戸期の資料に、山の手言葉を写したものが殆んどないことである。江戸末期の山の手言葉の資料として、中村通夫氏によって紹介された、天保十四年刊行「夢酔独言」も口頭語資料としては価値が低く、一例をあげると、

例16、「みしま宿にては、水戸のはりまの守が家来はとめぬか」（夢酔独言）

のように、文章語脈が多いので、終止形式の研究には不適当である。

江戸時代の山の手言葉は、山の手の住人が多く武士であった関係上、武家言葉が中心になるはずだが、これを記した、まとまった資料は全然なく、種々の資料に散見する、武家社会の人々の質問表現を集めてみると、すべて、カ・カナ・カエ・カノ・ノウ・カネ・カイノ・エなどの終助詞がついたもので、中でも「準体助詞の＝カ」と終助詞カナの終止形式が多くみえている。このように、江戸町人社会の人々の質問にほとんどない、終助詞カナ・カノ・カイノが見えるところに、この社会の言葉の特徴があるのかも知れない。データが、他に較べて余りに少いので、これだけではその実体は全くつかめないが、以上の事からあるいは京阪語的な色彩が強かったのではないかと推察されるのである。いずれにしても、明治前半期に突発した、現代東京語的な諸傾向のきざしは、これら武家言葉の中には全く見られないようである。たゞ、これらの武家言葉、山の手言葉を「本江戸」[註5]などと呼んで、当時の江戸町人が、位相の異る言葉として意識していたことは、先学諸氏もすでに御指摘の通りであるが、結局この「本江戸」の姿と「本江戸」から現代東京語の山の手言葉への推移がつかめないところに、明治前期、山の手言葉の資料の拡充に従って急激な変化がもたらされた、最も大きな原因があると、考えられるのである。

それにしても、この時期の資料に急に現われた、いわゆる現代東京語的な終止形式は、比較的若い人々の発問に多く、またこの頃に消滅しつつあった、江戸語的な終止形式は中年以上の年令層の人々の発問に多く見られ、例を「浮雲」にとるならば、終助詞カエ・エのある質問および、「お＝活用語連用形＝カ」の質問は母親お政に限られ、一方、終助詞ノのある質問は娘のお勢、文三など若い人々に限られている。同時代の他の資料をみても、一般にこれと同様の傾向が見られ、特に、終助詞ノ・ノサ・ノヨ・カシラ、また、連用形に続くテ、などのある質問は若い人々のみに使われている。以上の事実から、これら、現代東京語的な終止形式が、江戸期山の手言葉にあったとしても、明治初期をほとんどさかのぼらないのではないかと思われる。明治の初めは、やはり近代東京語における質問表現の一つの変動期、転換期と見てさしつかえないと考えるのである。

以上、第一部で考察した、終止形式の通時的展開に、資料の価値と位相的性格という面から、再検討を試みたが、結局、第一部の結論は、「多少考慮すべき面を含んではいるが、一応の妥当性はもっている」と考えられるのである。

〔註5〕 式亭三馬の滑稽本「狂言田舎操」の中で、言葉とがめをされた江戸ッ子が「又詞とがめか。（中略）ハテ江戸訛（えどだまり）といふけれど。おいらが詞は下司下郎（げすげろう）で。ぐっと鄙（いな）しいのだ。

正銘の江戸言といふは。江戸でうまれたお歴〳〵のつかふのが本江戸さ。これは又ほんの事たが。何の国でも及ばねへことだ。然様然者。如何いたして此様仕りましてござる。などといふ所は。ちゃんとして立派で。はでやかで実も吾嬬男はづかしくねへの。京女郎と対句になる筈さ。(下略)」とのべている。これについて、中村通夫氏は「東京語の性格」の中で、「三馬のいう「本江戸」――「正銘の江戸言」――と申しますものは、江戸生れの武家旗本などの言葉をさしたのではないかと見られますが、このような対立意識が江戸時代からあったということは、(中略)山の手言葉の歴史を考えて行こうと志すものにとっては、一つの大きな示唆を与えるものとして重要なことであると考られるのであります」(206～207ページ)と論じて居られる。

第三部

この研究の基礎になったデータの総数は二八九四で、このうち、男性の発問が一八二五、女性の発問が一〇六九である。これを形の上からわけると、つぎのようになる。

第四表

終止形式＼疑問詞の有無	文中に疑問の詞を含むもの	文中に疑問の詞を含まないもの	計
質問の終助詞(カ・ヤ)をもつもの	二〇一	一〇七七	一二七八
カ・ヤ以外の終助詞をもつもの	四一二	一四一	五五三
終助詞をもたないもの	八一六	二四七	一〇六三
計	一四二九	一四六五	二八九四

この研究の主な資料を、年代順に整理すると、次の通りである

○「江戸語的形式の形成時代」の資料

「鹿の巻筆」(貞享3)明治43年複製版
「枝珊瑚珠」(元録3)近世文芸叢書
「正直咄大鑑」(元録7)近世文芸叢書
「新話笑眉」(正徳2)近世文芸叢書
「水月ものはなし」(宝暦8)未刊江戸文学全集
「郭中奇談」(明和6)洒落本大系
「遊子方言」(明和7)一冊本版本不明東京教育大学国語学研究室蔵
「友だちばなし」(明和7)近世笑話全集・江戸小咄全集
「鹿の子餅」(安永1)近世文芸叢書
「譚嚢」(安永1)近世文芸叢書
「妓者呼子鳥」(安永6)日本名著全集
「鯛味噌」(安永8)日本名著全集
「柳巷訛言」(天明6)日本名著全集
「娼妓絹篩」(寛政3)日本名著全集
「馬鹿長命子気物語」(寛政3)日本名著全集
「世上洒落見絵図」(寛政3)日本名著全集
「十四傾城腹之内」(寛政5)日本名著全集
「忠臣蔵前世幕無」(寛政6)日本名著全集
「詞葉の花」(寛政9)日本名著全集
「辰巳婦言」(寛政10)日本名著全集
「世諺口紺屋雛形」(寛政10)日本名著全集
「江戸市川評判図会」(寛政11)日本名著全集

「稗史億説年代記」（享和2）日本名著全集
「御誂染長寿小紋」（享和2）日本名著全集
「的中地本問屋」（享和2）日本名著全集
「人間万事吹矢的」（享和3）日本名著全集

○「江戸語的形式の成熟時代」の資料
「浮世風呂」（文化10）（十二冊本版本架蔵）
「人間万事虚誕計」（文化10）日本名著全集
「春色梅児誉美」（天保4）（四冊本版本架蔵）
「仮名文章娘節用」（天保5）日本名著全集
「夢酔独言」（天保14）勝海舟全集
「花街模様薊色縫」（安政6）日本名著全集

○「現代東京語的形式の時代」の資料
「西洋道中膝栗毛」（明治3）明治大正文学全集
「安愚楽鍋」（明治4）現代日本文学全集
「胡瓜遣」（明治5）明治文化全集
"A Grammer of the Japanese Spoken Language"（明治5）
東京大学国語研究室蔵明治21年刊四版による
「江湖機関西洋鑑」（明治6）明治文化全集
「繰返開花婦見月」（明治7）日本戯曲全集
「文明田舎問答」（明治11）明治文化全集
「当世書生気質」（明治18）岩波文庫
「浮雲」（明治20）岩波文庫
"A Handbook of Colloquial Japanese"（明治21）東京教育大学国語学研究室蔵
「金色夜叉1章～16章」（明治30）明治大正文学全集
「辰巳巷談」（明治31）現代日本文学全集
「蒲団」（明治40）岩波文庫
「雪」（大正1）角川文庫「久保田万太郎戯曲集」
「九月慨」（大正8）創元文庫「あさくさばなし」
「続九月慨」（大正9）創元文庫「あさくさばなし」
「暗夜行路」第一部（大正10）岩波文庫
「浅草紅団」（昭和4）市民文庫
「濕東綺譚」（昭和11）新潮社版「永井荷風集」
「綴方教室」（昭和12）中央公論社版
「浮沈」（昭和17）新潮社版「永井荷風集」
「踊子」（昭和19）新潮社版「永井荷風集」
「えり子とともに」第一部（昭和25）市民文庫
「風ふたたび」（昭和26）朝日新聞
言語生活「録音器」2号～19号（昭和26～28）
シナリオ「千羽鶴」（昭和27）三笠文庫

以上

〔附記〕この論文の執筆に当っては、佐伯梅友博士をはじめ東京教育大学国語学研究室の諸先生、諸先輩、及び中村通夫氏、松村明氏に御指導、御助言をいただいた。厚く感謝いたします。

―東京教育大学大学院学生―